

## 家族意識の長期時系列変化から考える「女性の就労」の位置づけ

——「日本人の意識調査」データを用いて——

○中西 泰子 (相模女子大学)

### 1. 目的・背景

本報告の目的は、戦後日本において女性が就労することがどのような意味合いにおいて捉えられてきたのか、その意識の変遷を確認することにある。そのために、まず①女性の就労に関する意識とその他の家族意識（理想の家庭観・夫婦の姓に関する意識・夫の家事分担意識）の回答傾向の組み合わせパターンを把握し、どのようなパターンが併存してきたのか、どのようなパターンが時代やコーホートによって主流となってきたのかその分布を確認する。さらに②それらのパターンは本人職業によってどのように規定されてきたのかを検討する。

長期の時系列的変化を把握するために、1973年から5年毎に継続されてきた「日本人の意識調査」の二次分析を行う。当該調査は、人々の意識や態度がどのように変化するかを把握するため、調査開始から質問文や回答選択肢の文言をほとんど変えていない。

当該調査が対象とした時代について落合は、「家族とジェンダーという観点からみれば、オイルショック後の対策として女性の非正規雇用が制度化され、M字型のライフコースが作り出され固定されていった…きわめて特異な道を日本が歩み始めた時期」（落合 2008:46）と位置づけたうえで、意識の変化は一方的に流れているかに見えて時代の中にある屈曲をうつつだしていると述べている。

本報告では、同じ質問文に対して人々が想定する内容は変わっていくこと（質的变化）を含みこむ形で意識の変遷を把握し、女性の就労がどのような意味合いにおいて人々に認識されてきたのかを実態との関連もふまえて明らかにしていくことを目指す。

### 2. 方法

「日本人の意識調査」（1973～2008年）を用いて、女性の就労についての意識（家庭と職業：結婚した女性が職業を持ち続けることについてどう考えるか）と理想の家庭観（「夫唱婦随」「夫婦自立」「性別役割分担」「家庭内協力」のどれが最も好ましいか）、夫の家事分担についての意識（父親が台所の手伝いや子どものおもいをすることについて）、夫婦の姓についての意識（一般に結婚した男女は名字をどのようにしたらよいか）の4つの質問項目について潜在クラス分析を行い、その回答傾向の組み合わせによるパターンを析出した。その析出したパターンについて、それぞれが時代・コーホートや本人職業とどのように関連するのかについて検討を行った。

### 3. 結果

「日本人の意識調査」1973年～2008年までの合併データに対して男女別に潜在クラス分析を行い、男女それぞれに4つの回答パターンを析出した。有配偶女性の就労継続を認める意識が「現代的」な家族意識と結びつくパターンがある一方で、「伝統的」な家族意識と結びつくパターンもあることなどが確認された。

#### <謝辞>

二次分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから「日本人の意識調査（NHK）」の個票データの提供を受けました。また本研究は、JSPS 科研費基盤研究(C)（課題番号: 22K01914）の助成を受けて行っています。

#### <文献>

落合恵美子 2008 「近代家族は終焉したか——調査結果が見せたものと隠したもの」NHK放送文化研究所編『現代社会とメディア・家族・世代』新曜社:39-58.

(キーワード: 女性の就労、家族意識、時系列変化)